

巻頭言

オリジナリティーの質

佐藤 嘉洋（さとう よしひろ）

所属：工学研究科 械物理系専攻

専門分野：生産加工学（材料加工学）



多くの理系学部を持つ大学には、「機械工作」や「ガラス工作」等の併設の工場があった。「あった」と過去形にしたのは、その数がどんどん減ってきているからである。理由は幾つか考えられると思うが、最大のものは人件費の削減、経費削減ではないかと推察している。削減には憂慮している。

先ず、併設の工場の役割について考えてみたい。理系の学部ではアイデアを形に移すために手作りの装置が伝統的に用いられてきた。この装置を作るのが併設の工場の役割であった。戦後になり工学部の増設等が始まると予算の不足分を補うために工場が利用されることもあったように思われる。このため工場は各種の依頼に対応するために非常に多忙な時期も経験している。この経験の中で工場の役割についての考え方も深化してきたように思われる。大学の工場でなければできないようなものが色々作られるようになってきた。職員さんのなかにも「難しい仕事でなければ持ってくるな」のような方は、少し昔の大学の工場には結構おられた。このような環境の中で各大学においてオリジナリティーを競うような研究が行われてきたように思う。現在、毎年のように自然科学の分野でノーベル賞を受けているが、20~30年前の研究環境が成せる業であったようにも思う。

最近グローバル化が進行し、あらゆる場面での競争が熾烈を極めていく。大学の研究活動も例外ではなく、世界中を巻き込んだ競争が行われている。世界中で同じような装置を用いて同じような材料で進められる研究では、似たり寄ったりの結果にならざるをえない。ここで重要となるのがオリジナリティーである。自分のアイデアで組み上げる実験装置は、それだけでオリジナルな結果を予想させる。オリジナリティーの質が異なるのである。

大学の工場の役割が重要になりつつある現在、その数がどんどん減ってきているのは悲しいことである。日本の科学技術は、この先も大丈夫か、ノーベル賞とも関係していけるのだろうか、と考えてしまう。幸いにも市立大学では、工場がまだまだ元気と思う。これを継続・発展させたいものである。さしあたっては府立大学との統合問題を難なく切り抜けて頂きたいと思います。